3mm

埋蔵文化財調査報告書７

―平成 25 年度　国庫補助事業　市内遺跡調査報告書―

大 板 井 遺 跡 28
小郡若山遺跡７
八坂末安遺跡２
小郡前伏遺跡５

小郡市文化財調査報告書　第２８８集

2015
小郡市教育委員会

序

福岡県の中西部に位置する小郡市は、西鉄天神大牟田線が南北に縦断し、西に国道３号線とJR鹿児島本線が走る、交通の要衝として発展を遂げてきました。これまで市域北部のニュータウン開発や中部の工業団地造成に先立って埋蔵文化財の発掘調査が数多く実施され、国指定史跡「小郡官衙遺跡」や重要文化財「小郡若山遺跡出土多鈕細文鏡」のような発見がありました。これらの存在によって、小郡市は『遺跡の宝庫』として全国的に著名となり、考古学ファンや研究者の注目を集め続けています。

近年は埋蔵文化財のみならず、市街地に残る石碑や古い町並み、日々の暮らしの中で伝えられてきた伝承の調査も進めています。また、近接する佐賀県鳥栖市や基山町との歴史的・文化的なつながりをいかした活動も行っています。土地に根付いた歴史と文化は、私たちの生活を豊かにするだけでなく、そこで生まれ育った人びとの精神的なルーツとも成り得る重要な存在です。守り伝えることはもちろんのこと、より深く厚みを持ったものとするために、これらの調査には真摯な姿勢で向き合っていかなければなりません。

今回ここに報告いたしますのは、平成25年度の国庫補助事業として発掘調査を実施した埋蔵文化財です。いずれも小規模な調査ですが、郷土の歴史を知るための貴重な情報源となりました。本書が、小郡市の歴史と文化を次世代へ継承するための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の各調査において市内在住のみなさまには多大なご協力をたまわりました。記して御礼申し上げます。

平成27年3月31日

小郡市教育委員会

教育長　清武　輝

例　言

1．本書は平成25年度国庫補助事業として、小郡市教育委員会が実施した大板井遺跡28、小郡若山遺跡７、八坂末安遺跡２、小郡前伏遺跡５の発掘調査報告書である。

2．本書に掲載する遺構・遺物の実測は調査担当者が行い、製図は久住愛子が行った。

3．本書に掲載する遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺物写真撮影は有限会社システム・レコに委託した。

4．出土遺物の洗浄・復元には衛藤知嘉子・佐々木智子の協力を得た。

5．本調査に関わる出土遺物・写真・カラースライド等は小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。

6．本書は第１・２章及び大板井遺跡28・小郡若山遺跡７・八坂末安遺跡２を上田、小郡前伏遺跡５を西江が執筆し、上田が編集を行った。

凡　例

1．本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に拠っている。

2．本書で用いた標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。

3．本書で用いている略号は以下のとおりである。

溝状遺構（溝）：SD　土坑：SK　ピット：SP　不明遺構：SX

4．挿図中に示している数字は本文中の各遺物番号と一致する。

本　文　目　次

序　凡例

第１章　調査の経過と組織 …… 1

【大板井遺跡 28】
【小郡若山遺跡７】
【八坂末安遺跡２】
【小郡前伏遺跡５】

第２章　位置と環境 …… 2

第３章　調査の成果 …… 4

（１）大板井遺跡 28 …… 4
【調査の概要】
【遺構と遺物】
【小結】

（２）小郡若山遺跡７ …… 7
【調査の概要】
【遺構】
【小結】

（３）八坂末安遺跡２ …… 9
【調査の概要】
【遺構と遺物】
【小結】

（４）小郡前伏遺跡５ …… 17
【調査の概要】
【遺構と遺物】
【小結】

抄録　奥付

挿図目次

第１図　調査地位置図(S=1/5,000) ……1
第２図　周辺遺跡分布図(S=1/50,000) ……3
【大板井遺跡28】
第３図　大板井遺跡28　遺構配置図(S=1 /100) ……4
第４図　出土遺物(S=1/4) ……5
第５図　大板井遺跡28周辺調査区と今回調査地点(S=1/1,000) ……6
【小郡若山遺跡７】
第６図　小郡若山遺跡７　遺構配置図(S=1/100) ……7
第７図　小郡若山遺跡７周辺調査区と今回調査地点(S=1/1,200) ……8
【八坂末安遺跡２】
第８図　八坂末安遺跡２　遺構配置図(S=1/100) ……9
第９図　１～４・６号土坑　平・断面図(S=1/40) …… 10
第10図　１・２・10号土坑出土遺物(S=1/4) …… 11
第11図　５号土坑　平・断面図(S=1/40) …… 12
第12図　５号土坑出土遺物(S=1/4) …… 13
第13図　７～10号土坑　平・断面図(S=1/40) …… 14
第14図　不明遺構　平・断面図(S=1/20) …… 16
【小郡前伏遺跡５】
第15図　小郡前伏遺跡５　遺構配置図(S=1/60) …… 18
第16図　１号溝　土層断面図(S=1/40) …… 19
第17図　１号溝　土馬・紡錘車出土状況(S=1/20) …… 20
第18図　１号溝　土馬・紡錘車出土状況拡大図(S=1/8) …… 20
第19図　出土遺物(１～３・６:S=1/4、その他:S=1/2) …… 21
第20図　周辺遺跡位置図(S=1/25,000) …… 22
第21図　筑紫平野東西官道使用時期における小郡前伏遺跡５周辺の
遺跡動向(S=1/1,250) …… 22

写真図版目次

【大板井遺跡28】
図版１　①大板井遺跡28　全景(南から)
②調査区南西部ピット群　完掘状況(北から)
③調査区北東部ピット群　完掘状況(北西から)
④調査区南東部ピット群　完掘状況(南西から)
⑤調査区北西部ピット群　完掘状況(北西から)
【小郡若山遺跡７】
図版２　①小郡若山遺跡７　全景(東から)
②小郡若山遺跡７　全景(西から)
③調査区壁面　土層断面
【八坂末安遺跡２】
図版３　①八坂末安遺跡２　全景(西から)
②１号土坑　土層断面(西から)
③１号土坑　完掘状況(東から)
④２号土坑　完掘状況(北から)
⑤４号土坑　土層断面(東から)
図版４　①４号土坑　完掘状況(南から)
②５号土坑　東西土層断面①(南から)
③５号土坑　東西土層断面②(南から)
④５号土坑　南北土層断面①(東から)
⑤５号土坑　南北土層断面②(東から)
⑥５号土坑　遺物出土状況①(南東から)
⑦５号土坑　遺物出土状況②(南東から)
⑧５号土坑　ベルト除去後(南から)
図版５　①６号土坑　土層断面(東から)
②６号土坑　完掘状況(東から)
③７号土坑　完掘状況(南から)
④10号土坑　土層断面(北から)
⑤10号土坑　完掘状況(南から)
⑥不明遺構　焼土検出状況(東から)
⑦不明遺構　サブトレンチ土層断面(東から)
⑧１号溝状遺構　完掘状況(西から)
図版６　八坂末安遺跡２　出土遺物
【小郡前伏遺跡５】
図版７　①小郡前伏遺跡５　全景(西から)
②１号溝　A-A' 東壁土層(西から)
③１号溝　B-B' ベルト土層(西から)
④１号溝　C-C' ベルト土層(東から)
⑤紡錘車　出土状況(北から)
図版８　１号溝　検出状況(西から)
図版９　①土馬・紡錘車　出土状況(西から)
②土馬　出土状況(南から)
小郡前伏遺跡５　出土遺物①
図版10　小郡前伏遺跡５　出土遺物②

第１章　調査の経過と組織

本書に掲載している遺跡の調査は、各事業において個人住宅建設に先立つ「埋蔵文化財の有無に関する照会」が提出されたことに端を発する。これを受けて試掘調査を実施し、埋蔵文化財の存在を確認したため、発掘調査による記録保存が必要な旨の回答を行った。その後、施工業者と小郡市教育委員会で協議を行い、平成25年度国庫補助事業の一環として建物建設部分の発掘調査を実施、翌年度に調査報告書を刊行することで同意を得ている。それぞれの調査の経過と組織については下記のとおりである。

【大板井遺跡28】（事前審査番号3033）

平成25年8月19日表土剥ぎ開始　21日人力による遺構検出・掘削開始、以後随時遺構掘削、記録図面作成、写真撮影を実施　28日全景写真撮影　9月11日埋め戻し実施・完了

【小郡若山遺跡７】（事前審査番号3077）

平成25年12月２日表土剥ぎ開始　３日人力による遺構検出・掘削、記録図面作成、写真撮影を実施　15日全景写真撮影　16日埋め戻し実施・完了

【八坂末安遺跡２】（事前審査番号3068）

平成25年11月18日表土剥ぎ開始　19日人力による遺構検出・掘削開始、以後随時遺構掘削、記録図面作成、写真撮影を実施　12月18日全景写真撮影　19日埋め戻し実施　20日埋め戻し完了

【小郡前伏遺跡５】（事前審査番号3112）

平成26年２月６日表土剥ぎ開始　10日発掘作業員導入、遺構検出・掘削開始、以後随時遺構掘削、記録図面作成、写真撮影を実施　20日全景写真撮影　21日遺跡全体図作成　26日埋め戻し実施・完了

各調査とも、現地調査終了後は図面・遺物整理作業及び報告書作成を実施している。

【調査の組織】

＜小郡市教育委員会＞

教育長　清武　輝
部長　佐藤秀行
文化財課長　片岡宏二
係長　柏原孝俊
主任主事　上田　恵（大板井遺跡28、小郡若山遺跡７・八坂末安遺跡２整理作業）
西江幸子（小郡前伏遺跡５）
嘱託　坂井貴志（小郡若山遺跡７現地調査）
姫野久恵（八坂末安遺跡２現地調査）

第１図　調査地位置図（S=1/5,000）
※各図面内の数字は調査次数を示す

第２章　位置と環境

（１）地理的環境

小郡市は福岡県中部に位置し、東西約６㎞、南北 12㎞、総面積 45.5㎢の南北に長い行政区域を有する。市域は宝満山を水源とし、筑後川へ合流する宝満川によって東西に二分される。西岸には脊振山系から派生する丘陵地（通称・三国丘陵）があり、これが南へ行くに従って段丘・台地へと緩やかに移行し、沖積地を経て筑後平野へ連なっている。東岸は独立丘陵である花立山（城山）を除くと、低台地を沖積平野が広がる非常に見晴らしの良い地域である。

（２）歴史的環境

小郡市内では昭和 40 年代の大規模宅地造成に先立つ発掘調査を皮切りに、数々の埋蔵文化財調査が行われてきた。行政区ごとの開発事業の疎密に由来する面もあるが、おおむね北部から中部にかけての全域に遺跡が分布しており、その主体となる時代も幅広い。以下、市内に分布する代表的な遺跡を中心に歴史的環境の概要を示す。

旧石器時代の資料は、花立山周辺や三国丘陵上で表採されたものがわずかに認められるのみであり、この時期の様相は不明な点が多い。縄文時代に関しては、干潟向畔ヶ浦遺跡（13）の落とし穴状遺構、大崎井牟田遺跡（23）の集石状遺構が確認されているが、集落の詳細な様相がわかる遺跡は未確認である。

弥生時代に入ると、三国丘陵の南端に位置する力武内畑遺跡（10）で水田耕作を伴う集落経営が始まり、やがて丘陵上に津古内畑遺跡（1）・横隈山遺跡（7）といった環濠を伴う前期集落が展開していく。前期末になると市域中部にも集落が営まれるようになり、小郡遺跡（18）・大板井遺跡（19）といった、拠点的集落が登場する。小郡遺跡では大型円形住居、大板井遺跡では７本の銅戈、両者に隣接する小郡若山遺跡（15）では多鈕細文鏡の埋納遺構が確認されている。多数の祭器と大規模施設を有するこの集落が、どの程度の勢力圏を保持していたのか興味深い。またこの時期には、八坂石塚遺跡（29）のように南部にある宝満川の自然堤防上にも集落が展開し始めるが、これまで調査事例が少ないこともあり、詳細な状況の解明は今後の調査に期待される。

古墳時代は、三国丘陵における前期古墳の形成で幕を開ける。津古生掛古墳（4）、津古１・２号墳（2・3）、三国の鼻１号墳（5）といった一連の前方後円墳が築造されたほか、寺福童遺跡（26）などで確認されている方形周溝墓も構築されるようになる。中期の資料は非常に少なく不明な点が多いが、後期になると花立山や三国丘陵上に群集墳が展開し、併せて横穴墓群も構築されている。集落は前期には津古生掛遺跡（4）や大崎小園遺跡（25）が見られ、これが後期にかけて市内全域に拡大していく。

律令期の小郡市は筑後国御原郡・御井郡の２郡で構成されるが、市域の大半は三井郡大刀洗町域とともに御原郡に相当する。御原郡を治める郡衙は、寺院的施設を持つ初期評衙とされる上岩田遺跡（20）から小郡官衙遺跡（18）、三井郡大刀洗町の下高橋官衙遺跡へと変遷することが明らかとなっている。これらを結ぶ東西方向の官道が、小郡正尻遺跡（16）・小郡前伏遺跡（17）や松崎六本松遺跡（21）で検出されており、さらに小郡官衙遺跡の第Ⅱ期の建物群と方向を同じくする官道跡も確認されている。

中世以降は集落立地が転換し、福童山の上遺跡（22）・八坂末安遺跡（30）のように市域南部へと拡大する。大型の３重溝を伴い多数の輸入陶磁が出土した稲吉元矢次遺跡（28）や西島遺跡（9）が拠点的集落であったと考えられる。その一方で三国丘陵から派生する台地上にも、大保龍頭遺跡（12）や三沢寺小路遺跡（11）などが見られる。

近世の小郡市は筑後国久留米藩の領地となり、その財政を支える農村地帯として位置付けられた。埋蔵文化財の発掘調査例はまだあまり多くないが、旧筑前街道や薩摩街道周辺の横隈上内畑遺跡（8）・小板井屋敷遺跡（24）、農村集落である福童町遺跡（27）などで遺構・遺物が確認されている。

このように小郡市では、市全域にわたって長年に渡る人々の生活が連綿と続けられてきた。

第２図　周辺遺跡分布図（S=1/50,000）

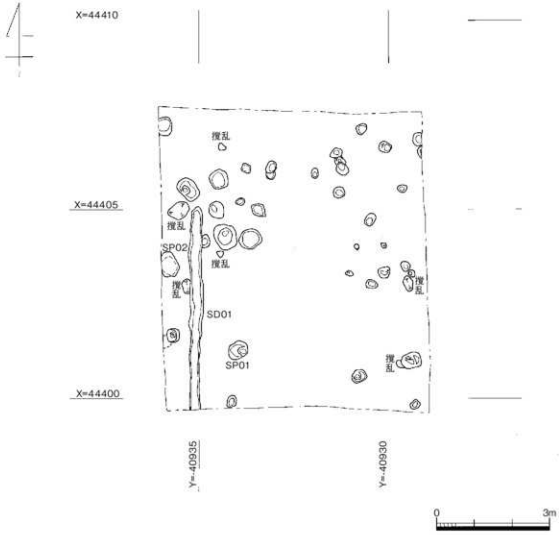
第３章　調査の成果

（1）大板井遺跡 28

【調査の概要】

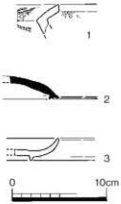
大板井遺跡は、小郡市域の中央を南北に流れる宝満川の西岸に位置する。脊振山系から派生する丘陵が南へ延びるにしたがって低位段丘となり、宝満川の氾濫原に突き出した一角を占める。これまでに 29 次の発掘調査（平成 26 年度調査、27 年度報告予定を含む）が行われており、弥生時代から近世までの複合遺跡であることが明らかとなっている。中でも弥生時代前期から中期の集落及び墓地では、多数の竪穴住居・貯蔵穴・祭祀土坑・溝状遺構と甕棺墓群が確認されており、昭和 10（1935）年には甘木鉄道敷設のための土取り工事の際に銅戈７本が出土するなど、この時期の拠点的集落であったことが伺える。

今回の調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地の南西部に相当し、近年の造成によってかさ上げされ



第３図　大板井遺跡 28　遺構配置図（S=1/100）

ているが、本来は１ｍ前後低い地形であったと思われる。遺構検出面は標高13.0m前後を測り、上面は大きく削平を受けている。溝状遺構１条とピット群を確認したのみであるが、ピットの残存状況は良好であった。北・東隣接地では、２・９次調査で弥生時代中期から古代にかけての竪穴住居群等が確認されており、この辺りは集落域の中心地であったと考えられる。



第４図　出土遺物（S=1/4）

【遺構と遺物】

１号溝状遺構（第３図、図版１）

調査区南西隅に位置し、南北方向にほぼ方位に沿って流れる。北端は調査区内で終息し、南側は調査区外へ延長する。断面はＵ字型を呈し、幅0.3m、深さは最大で10cm程度である。上部は大幅に削平されている。埋土は黒褐色シルトの単層で、弥生土器・中世土師器の細片が少量出土しているが、時期を示す資料は認められない。

その他の遺構と遺物（第３・４図、図版１）

調査区内では、中世の所産と思われる径２～30cmのピット群と、弥生時代の所産である径４～50cmのピット群を確認している。掘立柱建物を構成すると思われるものもあるが、調査区が狭域で不確定要素が多いため、今回は建物とは判断していない。

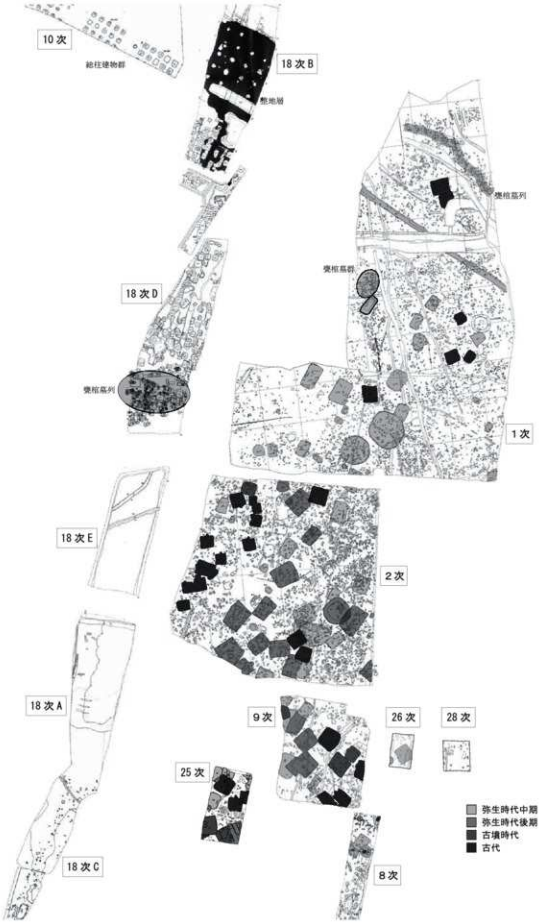
１は弥生時代後期の甕。口縁部の一部のみで全体に磨滅が激しい。２は須恵器の坏蓋。口縁部内側に断面三角の短いかえりが付く。３は磁器染付の皿。表土掘削時に同時期の資料が複数出土しているが、遺跡に伴う可能性は極めて低いと考えられる。

【小結】

大板井遺跡では、弥生時代前期に遺跡の所在する低台地の南東部分から集落経営が始まった。これが中期初頭まで継続し、前半になると台地の南西部分で劇的な発展を遂げることになる。これまでの調査で、集落域には大型のものを含む竪穴住居群と甕棺墓群、祭祀土坑群が高い密度で展開し、西に隣接する小郡遺跡とともに拠点的集落の様相を示すことが明らかとなっている。この傾向は中期後半まで続き、その後中期末から後期初頭の減退期を経て、後期中葉に再び集落が活気を取り戻す状況が見られる。

今回の調査区は中期前半の隆盛を迎える南西部集落域の南東端に相当する。北に隣接して１・２・９次調査区があり、この辺りが弥生時代から奈良時代にかけて、大板井遺跡の居住区の中心であったことが判明している。弥生時代中期には大型円型住居をはじめとする竪穴住居群が点在し、これに付随するかのように祭祀土坑が分布する。居住施設はほぼ均等に分散しており、特定の箇所への密集は認められない。居住空間は１次調査区を北西―南東方向に走るＶ字溝を北限として設定されたようで、その外側に甕棺墓群が営まれる。一方弥生時代後期の集落では、台地の南西縁辺部に居住施設が集中する傾向が見られる。この傾向は古墳時代・奈良時代へも継承され、特に古代の住居は小郡官衙遺跡に面した西側縁辺部と台地の南側端部に激しく偏って分布する。

28次調査区では、極少量ではあるが弥生時代中期および後期の遺物を確認している。明瞭な遺構は検出していないが、大板井遺跡の当該期の居住域がここまで延びることは明らかだろう。さらに、微量ながら古代の須恵器片が出土していることから、９次調査区で検出している住居群の時期の居住空間であったとも言えよう。また、26・28次調査区では近世の遺物の出土も見られた。これまでの大板井遺跡の調査では、近世初期の横隈街道に近い南東部を中心に中・近世の資料が確認されているが、近年の発掘調査では弥生時代の集落域でも同時期の資料が出土している。今後の資料増加を待って、これまで注目されることの少なかった「中･近世の大板井遺跡」の様相を検討する必要があろう。



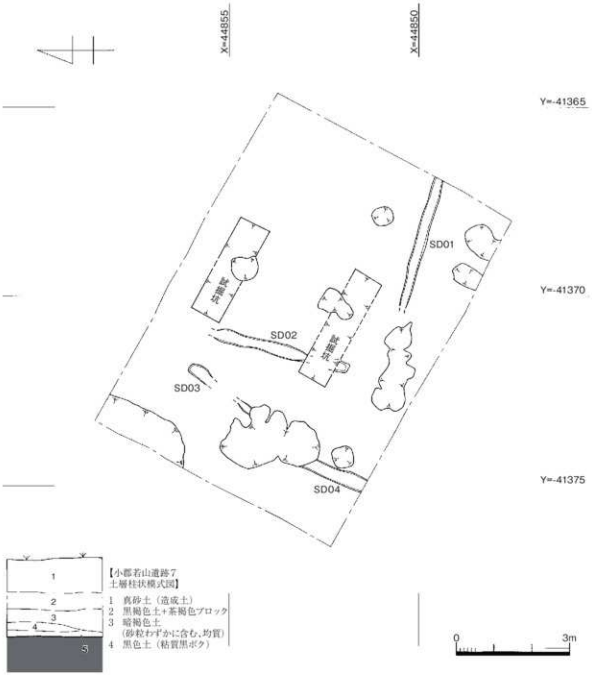
第５図　大板井遺跡 28 周辺調査区と今回調査地点（S=1/1,000）

（2）小郡若山遺跡７

【調査の概要】

小郡若山遺跡は、宝満川の西岸、市域中央部に形成された洪積台地上に位置する。この地域には弥生時代前期後半から集落の進出が始まり、小郡遺跡・大板井遺跡とこの小郡若山遺跡を中心に、中期前半から中頃に１度目のピークを迎える。周辺ではこれまで６次の発掘調査が行われ、弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡であることが判明している。３次調査では、集落域の中に多鈕細文鏡２面と樽型土器を埋納した土坑を検出しており、平成 10（1998）年に国の重要文化財に指定されている。

今回の調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地の中央部東寄りに相当し、小郡遺跡に非常に近い。遺構検出面の標高は記録不備のため不明であるが、現況 G.L. から７～ 80cmの造成土を除去した深さで暗褐色ローム層を確認している。遺構の残存状況から、この層の上層である黒色土が掘り込み面と考えられる。南東隣接地では、５次調査で弥生時代の所産と考えられる掘立柱建物２棟を検出している。



第６図　小郡若山遺跡７　遺構配置図（S=1/100）

【遺構】

１号溝状遺構（第６図、図版２）

調査区南東隅に位置し、やや北に振った東西方向に流れる。西端は上部削平によって調査区内で断絶し、東側は調査区外へ延長する。幅 0.25m、深さは最大で５㎝程度である。

２号溝状遺構（第６図、図版２）

調査区中央部に位置する。やや東に振った南北方向に流れ、１号溝状遺構とは直交する角度となっている。南側は調査区内で終息し、北側は上部削平によって断絶する。幅 0.35m、深さは最大で３㎝程度である。

３号溝状遺構（第６図、図版２）

調査区北西に位置し、北東―南西方向に流れる。北東側は調査区内で終息し、南西側は上部削平で一旦断絶したのち撹乱土坑に切られる。幅 0.3m、深さは最大で３㎝程度である。

４号溝状遺構（第６図、図版２）

調査区南西隅に位置する。北東―南西方向に流れるが、３号溝状遺構より北への傾きが強い。南西端は調査区外へ延長し、北東端は撹乱土坑に切られて断絶する。幅 0.35m、深さは最大で３㎝程度である。

【小結】

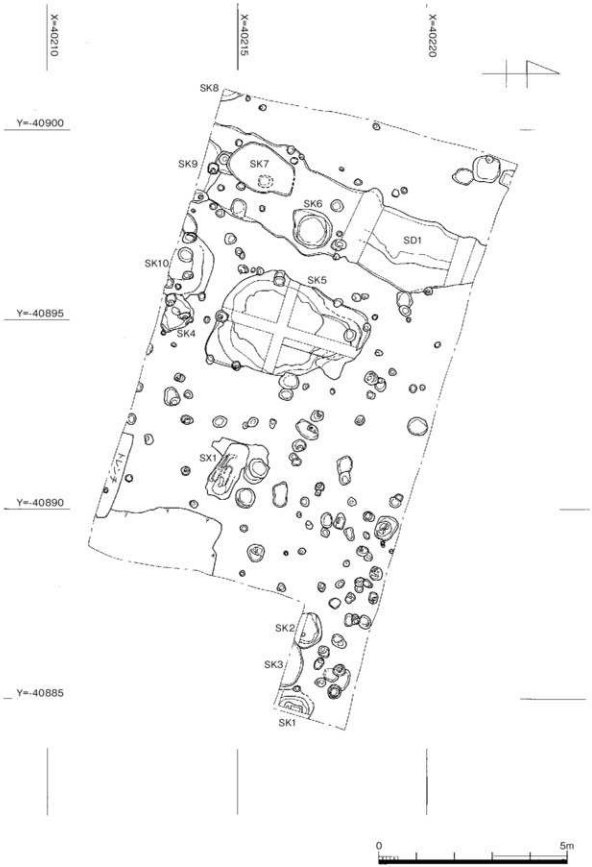
小郡若山遺跡は、弥生時代中期前半に小郡市中部の低台地上で広範に展開した「小郡・大板井遺跡」の集落域の西端を構成する遺跡と想定されている。これまでの調査では、弥生時代中期、後期、奈良時代初頭に集落形成のピークがあることが判明している。

遺構の密度は台地の南側縁辺部が高く、北へ行くに従って徐々に疎となる傾向が見られる。弥生時代中期の遺構としては、３次調査地で多鈕細文鏡埋納ピットが、６次調査地で大型の円形住居跡が確認されており、この時期の集落域の中でも特殊な地区であった可能性が高い。

今回の調査区で検出した遺構は、時期不明の溝状遺構４条のみであり、明確に弥生時代・奈良時代の遺構と判断できる資料は出土していない。但し、南西隣接地である５次調査地と北へ 150m の位置にある２次調査地では、わずかながらこの時期の遺構・遺物を検出していることから、この辺りが集落域の北限となるのではなく、居住域の中に設置された広場のような空間であったと思われる。

なお５次調査地では中世の所産である遺構・遺物も確認されている。今回検出した溝状遺構はこれらとの関連も想定できよう。

第７図　小郡若山遺跡７周辺調査区と今回調査地点
(S=1/1,200)

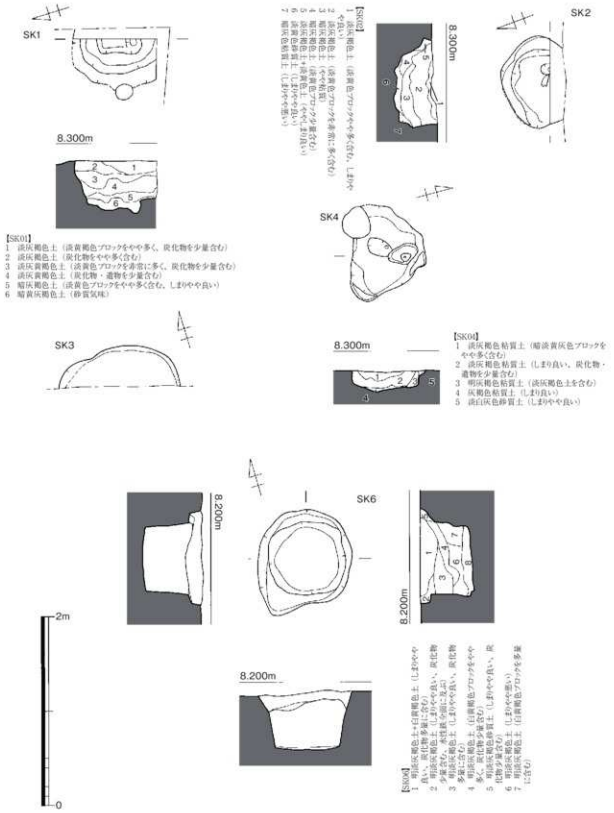


第８図　八坂末安遺跡２　遺構配置図（S=1/100）

（3）八坂末安遺跡２

【調査の概要】

八坂末安遺跡は小郡市域の南部、宝満川の東岸に所在する。遺跡は川の走行によって「用丸－味坂－元成－十楽－赤川」と南北方向に形成された自然堤防上に位置するが、周囲の水田とはあまり比高



第９図　１～４・６号土坑　平・断面図（S=1/40）

差のない微高地にあたる。遺跡の所在する味坂区は、都市計画上の市外化調整区域であるためこれまで開発行為が少なく、発掘調査があまり行われてこなかった。周辺では、圃場整備事業に伴う八坂石塚遺跡（全３次）にわたる調査と、八坂末安遺跡の１次調査が実施されているのみである。八坂石塚遺跡では、弥生時代前期から古墳時代後期にかけての集落を確認している。なお、八坂末安遺跡は中世以降に隆盛を迎える集落である。

今回の調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地の南端に相当し、南北に長い微高地の先端に位置する。遺構検出面は標高 8.1m 前後を測り、青灰～灰色の粘土混砂質土層を確認している。検出遺構には、土坑 10 基、溝状遺構１条、焼土のまとまりを含む用途不明の遺構１基、ピット群があるが、掘立柱建物を構成するピットは認められない。また、全体に遺物の出土量は少ない。八坂末安遺跡の北西には、考古学的な調査は実施されていないが、中世の史跡である西鰺坂城跡が所在しており、その影響下にある集落と想定される。

【遺構と遺物】

１．土坑

１号土坑（第９図、図版３）

調査区北東隅に位置し、東半部は調査区外へ延長する。主軸は北東―南西方向で、平面プランは不整な楕円形になると思われる。検出長 0.9m、検出幅 0.6m、深さ最大 0.55m を測る。二段掘りの様相を呈し、底面に隅丸長方形の掘り込みを持つ。埋土は淡灰褐色土を主体として水平堆積の様相を示す。

出土遺物（第 10 図）

１は土師器坏の底部で、磨滅気味だが回転糸切りの痕跡が確認できる。その他、瓦器椀の小片や土師器の坏・小皿などが少量出土している。いずれも中世の所産。

２号土坑（第９図、図版３）

調査区北東隅に位置する。南半部は調査区外へ延長し、主軸は東西方向をとる。平面プランは楕円形を呈すると思われる。検出長 0.95m、検出幅 0.7m、深さ最大 0.45m を測る。北辺に幅 10cmのテラスを、底面に円形のピットを持つ。埋土は淡灰褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。

出土遺物（第 10 図）

２は土師器坏。底部は回転糸切りで、内外面に煤の付着と黒変が認められる。燈明皿として使用したものか。この他にも、少量の土師器坏･小皿や瓦器椀の小片が出土している。いずれも中世の所産。

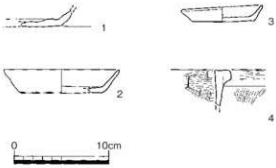
３号土坑（第９図）

調査区北東隅に位置し、南半部は調査区外へ延長する。２号土坑を切る。平面プランは楕円形を呈し、主軸は東西方向をとると考えられる。検出長 1.3m、検出幅 0.4m、深さ最大 5cmを測り、壁面は直線的に立ち上がる。出土遺物は皆無であった。

４号土坑（第９図、図版３・４）

調査区南辺中央に位置する。南半部は調査区外へ延長し、10 号土坑を切り、ピット群に切られる。平面プランは隅丸三角形を呈する。南北検出長 0.75m、東西検出幅 1.0m、深さ最大 0.2m を測る。北頂部と東頂部に小型のテラスを持ち、底面には楕円形のピットが見られる。埋土は淡灰褐色土を主体として水平堆積の様相を示す。

埋土から、近世の所産と思われる少量の

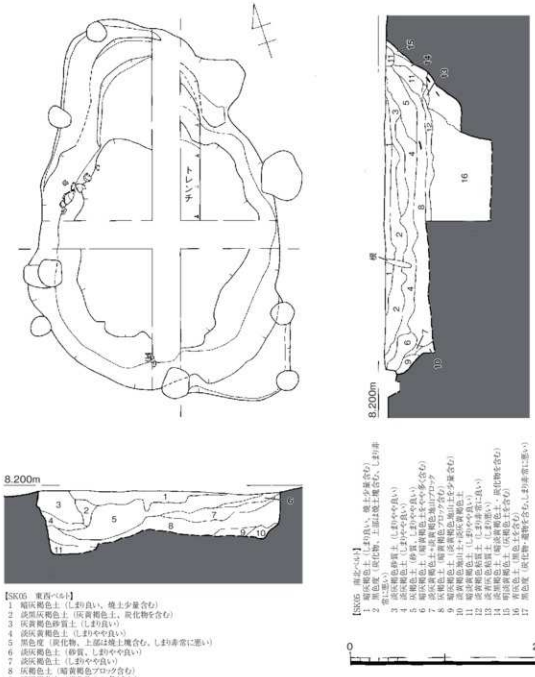


第 10 図　1・2・10 号土坑出土遺物（S=1/4）

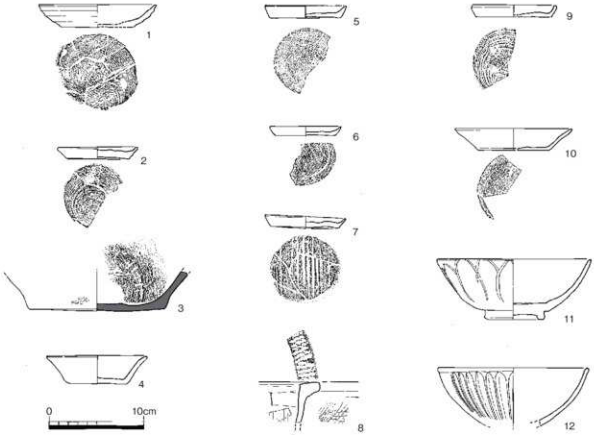
土師器片や陶器片が出土しているが、いずれも細片のため図示はしていない。

5号土坑（第11図、図版4）

調査区中央に位置し、ピット群に切られる。平面プランは不整形と判断したが、南東隅のテラス部分は浅い別土坑の可能性もある。北側に3段のテラスを持ち、さらにこれとは別のテラスが全周する。主軸はやや東に振った南北方向で、南北長3.85m、東西幅2.7m、深さ1.15mまで掘削しているが、底面は確認できていない。埋土が、掘り込み面と類似する淡灰黄褐色土を主体としていたため、検出



第11図　5号土坑　平・断面図（S=1/40）



第12図　5号土坑出土遺物（S=1/4）

面から45cmまでは十字ベルトを残して掘削し、それ以降は北ベルトの東面沿いを底面確認のためにトレンチ状に掘削している。掘り込み面が脆弱な土壌であり、上端が崩落する可能性があったことと、調査期間の都合上、土坑全体の埋土除去は行っていない。埋土はほぼ水平堆積の様相を示し、淡灰黄褐色土と黒色土もしくは黒灰褐色土が互層になっている。上部の埋め戻しには周辺を掘削した廃土を投入したと考えられる。遺物は上層から多く出土しており、廃棄土壙と考えられる。

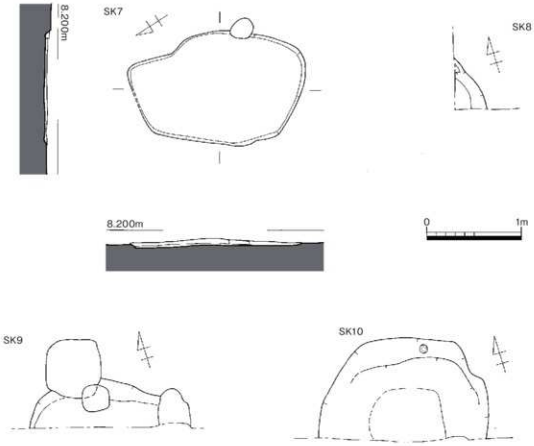
出土遺物（第12図、図版6）

今回調査区の中では最も遺物の出土が多く、バリエーションに富む。中世の所産であるものが主体だが、一部古墳時代から奈良時代の土師器片も含む。1・10は土師器坏。底部は回転糸切りで、体部が内湾して立ち上がるものと、直線的に立ち上がるものが混在している。2、5～7、9は土師器の小皿。2・7は底部が肥厚するタイプのもの、5・6は口縁端部が薄くつまみ上げたような形状をとるもの。3は瓦質の擂鉢。内面は使用により著しく磨滅している。8は土鍋の破片。口縁部がL字型をとり、縄目圧痕を施すもの。このほかに口縁部断面が三角形を呈するものも出土している。4は白磁の皿。全面に施釉し、口縁端部のみ掻き落としている。11・12は青磁の碗。12は鎬蓮弁紋を施し、釉薬の発色が美しい。このほか、土錘や鉄滓片が出土している。

6号土坑（第9図、図版5）

調査区中央部西寄りに位置し、1号溝状遺構に切られる。主軸はやや東に振った南北方向で、平面プランは不整円形を呈する。長さ1.0m、幅1.0m、深さ最大0.55mを測る。北側と南西部に変形したテラスを持ち、部分的に二段掘りの体裁をとる。壁面は直線的に立ち上がる。埋土は明淡灰褐色土を主体とする。形状から井戸と考えられる。

埋土から、中世の所産である土師器の坏・小皿、内黒の黒色土器の坏、同安窯系白磁碗などが出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。



第13図　7～10号土坑　平・断面図（S=1/40）

7号土坑（第13図、図版5）

調査区中央部西寄りに位置する。1号溝状遺構に切られ、上部は大きく削平されている。平面プランは不整楕円形で、南北方向に主軸をとる。長さ1.8m、幅1.2m、深さ最大5cmを測る。

埋土から、中世の所産である青磁小片や土師質の燈明皿などが出土しているが、いずれも細片で詳細な時期の特定にはいたらない。

8号土坑（第13図）

調査区南西隅に位置し、遺構の大半が調査区外に所在する。平面プラン・主軸とも不明。土坑として報告するが、大型のピットである可能性もある。南北検出長0.55m、東西検出幅0.35m、深さ最大0.17mを測る。出土遺物は土師器坏・小皿の細片がわずかに見られるのみであった。

9号土坑（第13図）

調査区南西隅に位置し、南半部は調査区外へ延長する。1号溝状遺構とピット群に切られる。平面プランは不整楕円形を呈すると思われ、東西方向に主軸をとる。検出長1.35m、検出幅0.5m、深さ最大0.14mを測る。遺物は土師器坏・小皿の細片が極少量出土したのみである。

10号土坑（第13図、図版5）

調査区南辺西寄りに位置する。南半部は調査区外へ延長し、4号土坑に切られる。記録不備のため

不明瞭であるが、平面プランは不整円形を呈し、主軸を東西方向にとると考えられる。二段掘りの様相を呈し、壁面は直線的に立ち上がる。検出長 1.8m、検出幅 1.1m、深さ最大 1.7m を測る。形状から井戸と思われる。

出土遺物（第 10 図）

３は土師器の小皿。底部は回転糸切りで整形時のひずみが激しい。４は土師器の土鍋で口縁部が短いＬ字型をなすもの。外面に厚く煤が付着している。この他、器形不明の陶器の小片や鉄滓片などが出土している。

２．溝状遺構

１号溝状遺構（第８図、図版５）

調査区西側に位置し、やや東に振って南北方向に流れる。６・７・９号土坑を切る。北半部は東岸に幅 0.8m のテラスを持つが、南半部へは連続しない。上部は削平されており、残存状況は非常に悪い。幅 1.9m、深さ最大 0.13m を測る。埋土の状況は記録不備のため不明であるが、規模と底面の形状から区画のための素掘り溝と推定される。

出土遺物（図版６）

埋土からは、いずれも小片であるが、土師器の坏・小皿のほか、陶器、石鍋、銅銭（皇栄通宝・宋銭）などが出土している。また少量ではあるが鉄滓を確認した。

３．その他の遺構・遺物

不明遺構（第 14 図、図版５）

調査区中央東寄りに位置する。主軸は北西―南東方向で、西半部に東西方向に長い不整楕円形、東半部に南北方向に長い不整形が組み合わさって一連の遺構を構成する。北端はピットに切られて形状をとどめていない。東西方向の不整楕円形部分は長さ 1.55m、幅 0.7m、土層断面図より深さは 0.2m 前後と推定される。検出段階から被熱硬化した焼土と、炭化物混じりの土が露呈している状況であった。記録不備のため範囲・形状は不明瞭であるが、焼土は西側に開く長い馬蹄形状に広がっており、土層断面図より５㎝程度の高さがあることを確認している。本来は検出面より高い位置まで土手状の構築物があったと推測される。何らかの焼成に関する施設と思われるが、現地調査では構造・用途について把握・判断することが出来なかった。南北方向の不整形部分は長さ 1.55m、幅 0.85m、土層断面図より深さは７～ 15cm前後と推定される。埋土に炭化物・焼土粒を非常に多く含むことから、焼成行為を行ったのち、廃棄物を掻き出して一時保管した灰原的な施設と推測される。

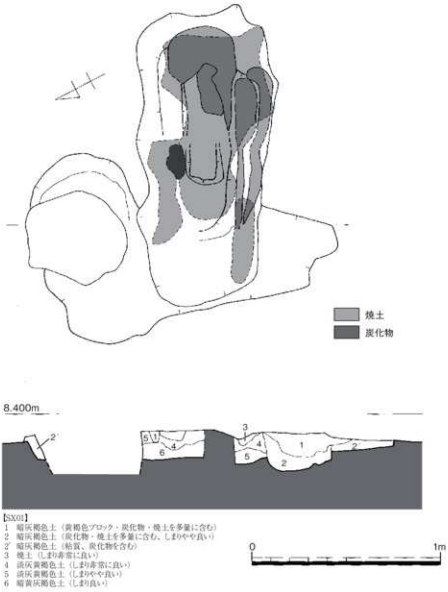
遺物の出土は極微量の土師器片が見られるのみだが、被熱による赤片が認められる。また、径５㎝前後の軽石が複数個出土している。

その他の遺物（図版６）

今回調査地では、表土掘削時や壁面清掃時に多数の遺物が出土している。検出遺構と同時期の土師器・陶磁器、石鍋のほか、１点ではあるが碁石を確認している。また、弥生時代の太型蛤刃石斧や古墳時代の耳環も見つかっている。

【小結】

小郡市南部に広がる低地はこれまでの発掘調査事例が非常に少なく、考古学的資料による歴史様相の解明が待たれる地域である。今回の調査区では中世の遺構を主体とする集落域を確認しているが、その他にも弥生時代･古墳時代の遺物が多数含まれていた。八坂末安遺跡の所在する自然堤防上では、八坂石塚遺跡の存在だけでなく、元成・十楽では過去の水路掘削の際に弥生時代中期の土器が、赤川では縄文時代晩期の土器や弥生土器・須恵器・土師器が採集されており、広い範囲で長期に渡る集落経営がなされていたと考えられる。八坂石塚遺跡では、土中に粘土化した植物遺体を多く含む層を確



第 14 図　不明遺構　平・断面図（S=1/20）

認しており、宝満川の氾濫によって度重なる冠水を受けながらも、当時の人びとがこの地域で生活を続けていた姿がうかがえる。

今回の調査区は 1 次調査地から南へ 400m ほど下った位置にあたる。1 次調査で検出した集落域は、東端に区画のための溝状遺構が南北方向に走り、その内部は前述の溝状遺構と方位を揃えた小規模な溝でさらに区画され、井戸・廃棄土坑が高い密度で構築されていた。これは稲吉元矢次遺跡や福童山の上遺跡といった同時期の遺跡で確認されている、一般的な中世前期集落の構造と一致している。本調査区も、立地や出土遺物から同じ集落の南西端部を構成すると考えられる。

検出した遺構のうち不明遺構については、周辺の土坑・溝状遺構から少量だが鉄滓が出土していることから鍛冶遺構の可能性が想定される。しかしそれを証明するだけの充分な検討と記録が行えず、深く反省する次第である。また、これを鍛冶遺構と想定すると、土器類を多数廃棄した土坑（5 号土坑）や遊具（碁石）の存在、河川堤防上という集落立地など、中世前期の拠点的集落と考えられる稲吉元矢次遺跡との共通点が数多く浮かび上がる。但しこれまでの調査地は極めて狭い範囲であり、両者を比較するには出土土器の器種構成比率など、検討課題も多い。隣接する西鯵坂城跡や中世荘園である鯵坂庄との関連を検討するためにも、今後の調査に期待が持たれる。

（4）小郡前伏遺跡５

【調査の概要】

小郡前伏遺跡は、宝満川右岸、小郡市北部の三国丘陵から南へとなだらかに伸びる低台地の縁辺部に位置し、これまで計４次の調査が実施されている。台地を東西に横断するように古代の集落跡や小郡官衙に関連すると考えられる官道が確認されている。

今回の調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地の西側に相当する。建物建設部分のみであったため、東西 12.0 m、南北 5.2 m の非常に矮小な範囲である。遺構検出面の標高は 17.0 m 前後、現地表から約 0.3 m 下る高さで確認している。出土遺構は筑紫平野東西官道の一部（官道北側の側溝１条を含む）とピット数基である。ピットには掘立柱建物を構成するものは認められなかった。

【遺構と遺物】

１．筑紫平野東西官道

道路状遺構（第 15 図、図版７・８）

調査区の南側半分の東西方向いっぱいに道路状遺構を確認した。うち、道路状遺構の側溝として１号溝が東西方向に検出されている。周囲の発掘調査の状況より、１号溝は北側側溝と考えられ、この側溝から南側には路面相当部分が現状で幅 1.6 ～ 3.0 m で検出した。すでに削平を受けていて、硬化面や波板状の痕跡はみられず、多数の後世の攪乱が掘り込まれていた。

１号溝（第 16・17・18 図、図版７・８）

１号溝は、道路状遺構の北側側溝にあたり、主軸はほぼ東西方向で直進する溝である。溝上端の幅は 0.6 ～ 0.9 m、下端幅は 0.18 ～ 0.4 m、深さ 0.3 ～ 0.45 m を測り、延長 12.0 m を検出した。断面形状は、逆台形上をなすが、部分的に北側にテラス部をもつ箇所もある。また、溝の床面は約５㎝の整地層を確認した。溝の床面レベルについては、調査区東で標高 16.48 m、西で 16.78 m を測り、概ね西から東へ傾斜する。土層の堆積状況は、レンズ状の純堆積を示しており、水成堆積を示す部分は確認されない。遺物は少量であるが、遺構検出面を含む覆土上位から土師器破片、須恵質の土馬、石製紡錘車が出土している。

出土遺物（第 19 図、図版９・10）

１・２・４・５は最上層から、３は覆土中から出土した。１・２は小型甕の口縁部である。２は口縁端部が肥厚する。１・２ともに外面は口縁部から頸部にかけてヨコナデを施し、外面は頸部から胴部にかけてヘラ削りを施す。３は甕の口縁部である。口縁端部から頸部にかけて徐々に肥厚する。内面は頸部から胴部にかけてヘラ削りを施す。４は１号溝最上層より出土した土馬で、破損品である。須恵質で、頭部と脚部を欠損する。体部には、工具痕が乱雑に残っており、ナデや押さえ、工具ナデで形成している。立髪は、粘土をつまみ上げて形成し、刻目で立髪の毛を一部表現している。また、鞍は、剥落したと考えられる。５はほぼ完形の滑石製紡錘車で、裏面には三方向に中央から縁辺に向けて直線の線刻が施されている。表・裏両面とも丁寧な研磨を施す。穿孔は上下両側から行う。

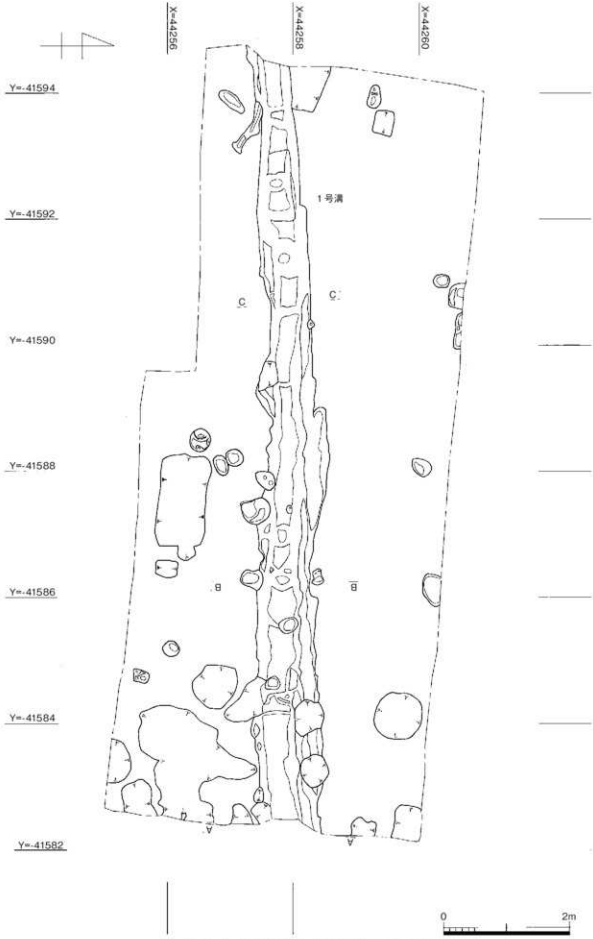
２．その他の遺構

２号攪乱（第 15 図、図版７）

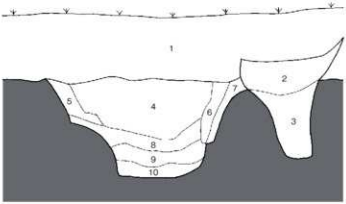
調査区東壁際の道路状遺構北側側溝である１号溝の直上で検出した。攪乱のため遺構の規模は記録していないが、この掘り込み中位から土師器甕の小片が出土している。

出土遺物（第 19 図、図版９）

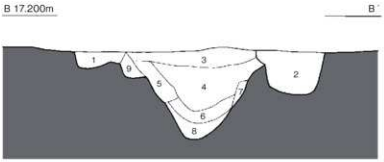
６は覆土中から出土した甑の把手部分である。粗雑なナデで把手のつまみ部分を形成し、内面は磨滅している。



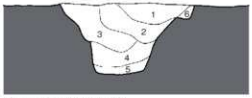
第 15 図　小郡前伏遺跡５　遺構配置図（S=1/60）



【1号溝 A-A' 東壁土層（西から）】
1　灰褐色土　黒褐色土ブロック混じる。【整地層】
2　淡灰褐色土　クリーム土のブロック多く混じる。1mm以下の小石混じる。しまりあり
3　灰褐色土　1mm以下の小石混じる。しまりあり
4　暗灰褐色土　1mm以下の小石混じる。しまりあり
5　淡灰褐色土　1mm以下の小石混じる。しまりあり
6　淡灰褐色土　黄褐色土少し混じる。1mm以下の小石混じる。しまりあり【流れ込み】
7　灰褐色土　黄褐色土少し混じる。1mm以下の小石混じる。しまりあり【流れ込み】
8　淡灰褐色土　しまりあり
9　灰褐色土　1mm以下の小石混じる。しまりあり
10　黄褐色土　黒褐色土ブロックがかなり多く混じる。しまりあり【溝の整地層】

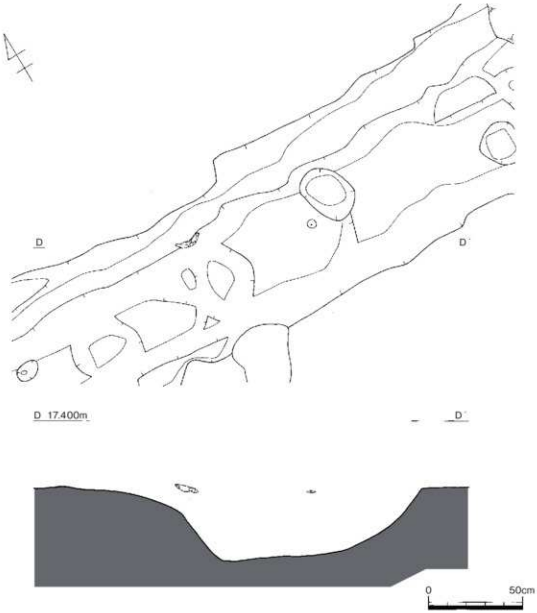


【1号溝 B-B' ベルト土層（西から）】
1　暗灰褐色土　しまりあり
2　暗灰褐色土　しまりあり
3　黒褐色土　しまりあり
4　暗灰褐色土　1mm以下の小石混じる。しまりあり
5　灰褐色土　しまりあり
6　暗灰褐色土　黄褐色土ブロック少し混じる。1mm以下の小石混じる。しまりあり
7　黄褐色土　淡灰褐色土ブロック少し混じる。しまりあり【地山の流れ込み】
8　黄褐色土　黒褐色土ブロックかなり多く混じる。しまりあり【溝の整地層】
9　淡灰褐色土　しまりあり



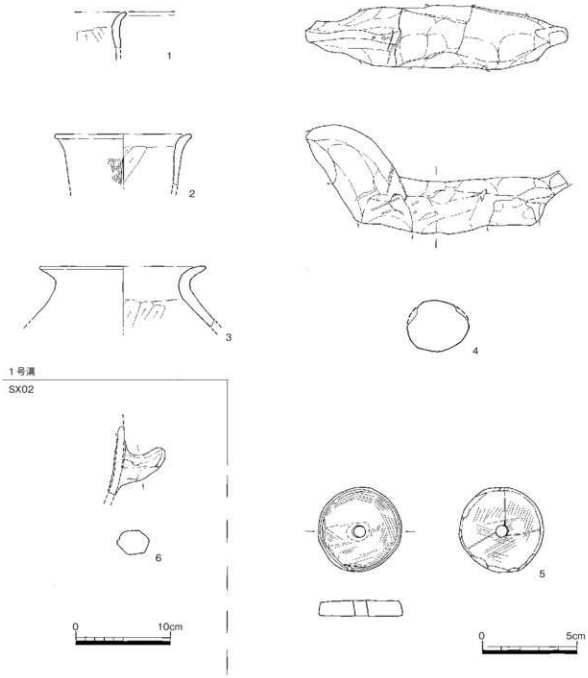
【1号溝 C-C' ベルト土層（東から）】
1　黒褐色土　しまりあり
2　灰褐色土　1mm以下の小石少し混じる。しまりあり
3　灰褐色土　黄褐色土ブロック混じる。しまりあり
4　灰褐色土　黄褐色土ブロック混じる。1mm以下の小石少し混じる。しまりあり
5　黄褐色土　黒褐色度ブロックかなり混じる。しまりあり【溝の整地層】
6　淡灰褐色土

第16図　1号溝　土層断面図（S=1/40）



第 17 図　1号溝　土馬・紡錘車出土状況（S=1/20）

第 18 図　1号溝　土馬・紡錘車出土状況拡大図（S=1/8）



第19図　出土遺物（1～3・6：S=1/4、その他：S=1/2）

【小結】

1．小郡前伏遺跡５の遺構と筑紫平野東西官道

「小郡前伏遺跡５」で検出された遺構は、筑紫平野東西官道に比定されると考えられる道路状遺構である。筑紫平野東西官道は、これまで小郡市教育委員会発行の報告書の中で数多く指摘されてきている。片岡宏二氏はこの東西の道路状遺構を「筑紫横道」と呼ぶが（片岡 2008）、本稿では、柏原孝俊氏・山崎頼人氏が呼ぶ「筑紫平野東西官道」（柏原・山崎 2005）を名称として使用することとする。

筑紫平野東西官道は、東から大刀洗町の宮巡遺跡、小郡市の松崎六本松遺跡１・２、向榮地遺跡、小郡大保道遺跡において検出されている。これまで発見された上記の遺跡を東西方向に結んだ線上には、今回調査した小郡前伏遺跡５が存在する。このことからも、小郡前伏遺跡５で発見された溝状遺構は、道路状遺構の北側側溝と考えられる。片岡氏が 2008 年の論文の中で行っている回帰直線の式に入れると理論上と実際の値の誤差が 6.7 m とやや大きい。しかし、これまで検出された筑紫野平野東西官道の道路幅は６m 前後、側溝幅は 0.5 ～ 0.6 m 前後であり、本遺跡で確認した溝幅と類似していることからも、本遺跡検出の溝は、筑紫平野東西官道の北側側溝を検出したと考えられる。

筑紫平野東西官道の使用時期は不明である。しかし、埋没時期については、宮巡遺跡で８世紀中頃の遺物が、松崎六本松遺跡２で８世紀前半の遺物が、小郡大保道遺跡で８世紀前半前後の遺物が出土しており、向榮地遺跡で７世紀前半～８世紀前半以後に埋没したと考えられていることから、８世紀中頃以降に埋没したと考えられてきた。本遺跡でも、８世紀前半代の遺物が出土していることから、

第 20 図　周辺遺跡位置図（S=1/25,000）

第21図　筑紫平野東西官道使用時期における小郡前伏遺跡５周辺の遺跡動向（S=1/1,250）

８世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

遺跡周辺では、小郡官衙遺跡や小郡官衙遺跡に通ずる道が発見された小郡前伏遺跡など、６世紀末～８世紀中頃にかけての集落が広がっている。また、筑紫平野東西官道周辺では、上岩田遺跡、下高橋官衙など当時の官衙が点在しており、活発な人々の往来があったのではないかと推察される。

２．古代出土の土馬について

本遺跡からは、須恵質の土馬が紡錘車や８世紀前半代の土器（第19図１・２）と一緒に半径0.7m以内から出土している。出土面が、遺構検出面であることから、混ざり込みなどの可能性も考えられるが、線刻が入る祭祀性の高い紡錘車も共に出土していることから、遺構に伴うものと考えたい。奈良県の朱雀大路の側溝からは、土馬と一緒に祭祀具が出土していることから、本遺跡の出土遺構もこうした道路の側溝で行った祭祀の跡と考えられる。土馬は、水に関わる祭祀に使用されることから、今回もこうした場所で使用されたのであろう。側溝を埋める際の祭祀行為として使用された可能性が考えられるが、推測の域をでない。福岡県内で道路状遺構から出土した土馬について調べたところ、太宰府市の大宰府条坊跡36と久留米市の筑後国府跡で発見されている。

小郡市内における土馬の出土状況であるが、上岩田遺跡から17点出土している。福岡県内に目を広げると、94点出土しているが、出土地点は古墳、窯跡周辺、官衙周辺など様々である。

小郡市内から出土した土馬について検討すると、つまみ上げて鞍を作成したり、沈線で手綱や尻繋の表現をしたりした飾馬が８点出土している。近畿地方出土土馬を対象に分析を行った小笠原好彦氏の分類（1975）や巽淳一郎氏の分類（1996）に照らし合わせると、主に７世紀後半段階から８世紀中葉段階に祭祀具として使用された可能性が想定され、実際出土遺構もこれらの時期に収まる。本遺跡で出土した土馬も、沈線で手綱を描き、鞍が剥落していることから、７世紀後半段階から８世紀中葉段階に祭祀具として使用された可能性が考えられよう。

＜主な参考文献＞＊報告書は割愛

小笠原好彦 1975「土馬考」『物質文化』25

片岡宏二 1999「古代の点と線」『古文化談叢』第44集

片岡宏二 2008「小郡官衙遺跡（福岡県小郡市）の再検討」『条里制・古代都市研究会第23号』条里制・古代都市研究会

柏原孝俊・山崎頼人 2005『上岩田遺跡Ⅰ』小郡市文化財調査報告書第200集　小郡市教育委員会

巽淳一郎 1996『日本の美術』第361号至文堂

日野尚志 1996「五　駅・伝路の改廃」『小郡市史第１巻　第３編古代の小郡　第２章筑後国御原郡の成立と小郡官衙』

法量＝口:口径、高:器高、底:底径、径:直径
器種＝土:土師器、須:須恵器、青:青磁、白:白磁、瓦:瓦質土器、瓶:瓶器、陶:陶器

大板井遺跡 28　遺物観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm・g（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存率	備考	実測番号
第4図 1		SP2	弥生・甕	残存高:3.05	内・外:灰白色 断:褐灰色	0.1～1.0mm白色砂粒少量、0.1mm雲母微微量に含む	良好	口:ヨコナデ 体・内:ヨコハケ	口～頸 小片		1
第4図 2		SP1	須・坏蓋	残存高:2.4	灰色	0.1～1.0mm白色砂粒、0.1mm雲母少量含む	良好	口:内外:回転ナデ 体・外:工具による回転ナデ 体・内:回転ナデ、不完ナデ	口～体 小片		2
第4図 3		表採	瓶・皿	残存高:2.35	灰白色	0.1mm白色砂粒を少量含む	良好	ロクロ水引き	口～底 小片		1

八坂末安遺跡 2　遺物観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm・g（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存率	備考	実測番号
第10図 1		SK1上層	土・坏	残存高:1.4	浅黄橙色	金雲母・微砂粒をやや多く含む	良好	底・外:回転糸切り 他は回転ナデ	底1/4		1
第10図 2		SK2上層	土・坏	口:(12.3) 底:(8.7) 高:2.5	外:にぶい橙色 内:灰白色	褐色粒をやや多く含む	良好	口・内外:回転ナデ 底・外:回転糸切り	1/4		1
第10図 3		SK10	土・皿	口:9.2 底:6.45 高:1.8	外:浅黄橙色 内:灰白色	金雲母を多量に含む	良好	口・内外:回転ナデ 底・外:回転糸切り	完形		6
第10図 4		SK10	土・鍋	残存高:3.8	外:灰褐色～黒色 内:褐灰色	砂粒を多く含む	良好	口:ヨコナデ、縦目圧痕体・外:タテハケ体・内:ヨコハケ	小片		1
第12図 1	6	SK5上層	土・坏	口:(12.4) 底:7.5 高:2.4	橙色	金雲母を非常に多く、微砂粒を微量に含む	良好	口:内外:回転ナデ 底・外:回転糸切り	3/4		1
第12図 2		SK5上層	土・皿	口:8.6 底:6.7 高:1.3	外:にぶい橙色～にぶい黄橙色 内:浅黄橙色～にぶい黄橙色	金雲母・砂粒を少量含む	良好	口・内外:回転ナデ 底・外:回転糸切り	1/2強		4
第12図 3	6	SK5上層	瓦・擂鉢	底:(14.2) 残存高:3.8	外:灰色 内:灰白色	砂粒を多く含む	良好	体・外:タテハケ体～底・内:ハケ、スリメ 底・外:板状工具ナデ	底全周		8
第12図 4	6	SK5	白・皿	口:(10.5) 底:6.15 高:3.0	素地:灰白色 釉薬:灰白色	0.1mm白色砂粒少量含む	良好	口・体:ロクロ水引き 底・外:回転ケズリ	完形	口縁端部は釉ハギ	12
第12図 5	6	SK5	土・皿	口:(8.6) 底:(7.4) 高:1.3	外:灰白色 内:灰白色～灰黄色	金雲母を非常に多く含む	良好	口・内外:回転ナデ 底・外:回転糸切り	1/2		4
第12図 6		SK5	土・皿	口:(7.6) 底:(6.4) 高:1.05	灰白色	褐色粒を微量、雲母微微粒をやや多く含む	良好	口・内外:回転ナデ 底・外:回転糸切り	1/4強		5
第12図 7	6	SK5	土・皿	口:8.6 底:7.25 高:1.45	橙色	橙褐色粒・金雲母少量含む	良好	口・内外:回転ナデ 底・外:回転糸切り、板状圧痕	4/5		3
第12図 8		SK5	土・鍋	残存高:4.3	外:にぶい橙色 内:浅黄橙色	白色粒をやや多く、石英を含む	良好	口:ヨコナデ、縦目圧痕体・外:タテハケ 体・内:工具によるヨコナデ、タテハケ	小片		9
第12図 9	6	SK5	土・皿	口:(9.0) 底:(8.0) 高:1.35	外:橙色～灰褐色 内:にぶい橙色～灰褐色	金雲母をやや多く、橙褐色粒を微量に含む	良好	口・内外:回転ナデ 底・外:回転糸切り	1/4強		6
第12図 10		SK5	土・坏	口:(12.4) 底:(9.6) 高:2.3	外:灰白色～褐灰色 内:浅黄橙色～にぶい黄橙色	微砂粒を含む	良好	口・内外:回転ナデ 底・外:回転糸切り	1/4強		1
第12図 11	6	SK5	青・椀	口:16.2 高台径:6.25 高:6.4	素地:灰色 釉薬:灰オリーブ色	0.1mm白色砂粒少量含む	良好	口体:ロクロ水引き、回転ケズリ、運弁紋	1/4		10
第12図 12	6	SK5	青・椀	口:(15.8) 残存高:6.1	素地:明オリーブ灰色～橙色 釉薬:明緑色	0.1mm白色砂粒微量に含む	良好	口体:ロクロ水引き、鎬連弁紋	1/4		11

小郡前伏遺跡 5　遺物観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm・g（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存率	備考	実測番号
第19図 1	10	1号溝 最上層（B区）	土・甕	残存高:3.8	にぶい黄橙色	3mm以下の石英をやや多く、1mm以下の金雲母を微微量に含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:ヨコナデ 体・内:ヨコナデ、ヘラケズリ	口～頸 小片		1
第19図 2	10	1号溝 最上層（B区）	土・甕	口:(14.6) 残存高:5.4	橙色	4mm以下の石英をやや多く含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:ヨコナデ、タタハケ 体・内:ヨコナデ、ヘラケズリ	口～体 小片		2
第19図 3	10	1号溝（A区）	土・甕	口:(17.6) 残存高:6.4	外:橙色 内:にぶい黄橙色	3mm以下の石英をやや多く含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:ヨコナデ 体・内:ヨコナデ、ヘラケズリ	口～体 小片		1
第19図 4	9	1号溝 最上層	土馬	縦:13.9 横:3.25 厚:2.57 重量:120g	灰白色	2mm以下の石英をやや多く含む	良好	ナデ、オサエ、工具ナデ	頭～胴		1
第19図 5	10	1号溝 最上層	紡錘車	縦:4.45 横:4.4 厚:3.038 重量:20.2						滑石製	2
第19図 6	10	2号攪乱	土・瓶	残存高:7.3	橙色	7mm以下の石英を多く含む	良好	体・内外:ナデ	把手 小片		1

①大板井遺跡 28　全景（南から）

②調査区南西部ピット群　完掘状況（北から）

③調査区北東部ピット群　完掘状況（北西から）

④調査区南東部ピット群　完掘状況（南西から）

⑤調査区北西部ピット群　完掘状況（北西から）

図版２

①小郡若山遺跡７　全景（東から）

②小郡若山遺跡７　全景（西から）

③調査区壁面　土層断面

①八坂末安遺跡２　全景（西から）

②１号土坑　土層断面（西から）

③１号土坑　完掘状況（東から）

④２号土坑　完掘状況（北から）

⑤４号土坑　土層断面（東から）

図版４

①４号土坑　完掘状況（南から）

②５号土坑　東西土層断面①（南から）

③５号土坑　東西土層断面②（南から）

④５号土坑　南北土層断面①（東から）

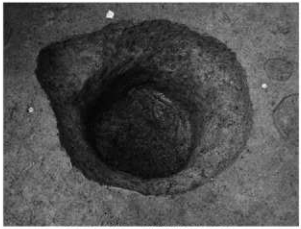
⑤５号土坑　南北土層断面②（東から）

⑥５号土坑　遺物出土状況①（南東から）

⑦５号土坑　遺物出土状況②（南東から）

⑧５号土坑　ベルト除去後（南から）

①6号土坑　土層断面（東から）



②6号土坑　完掘状況（東から）

③7号土坑　完掘状況（南から）

④10号土坑　土層断面（北から）

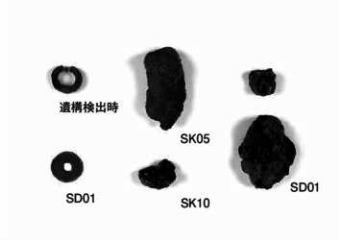
⑤10号土坑　完掘状況（南から）

⑥不明遺構　焼土検出状況（東から）

⑦不明遺構　サブトレンチ土層断面（東から）

⑧1号溝状遺構　完掘状況（西から）

図版６



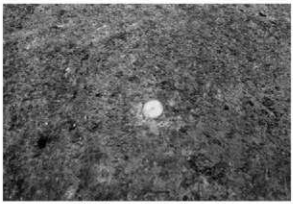
八坂末安遺跡２　出土遺物

①小郡前伏遺跡5　全景（西から）

②1号溝　A-A’東壁土層（西から）

③1号溝　B-B’ベルト土層（西から）

④1号溝　C-C’ベルト土層（東から）



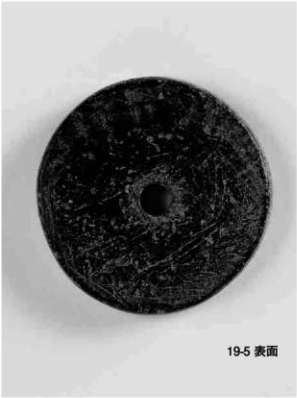
⑤紡錘車　出土状況（北から）

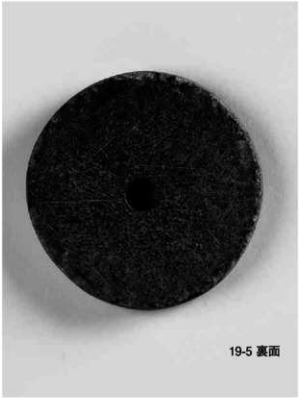
１号溝　検出状況（西から）

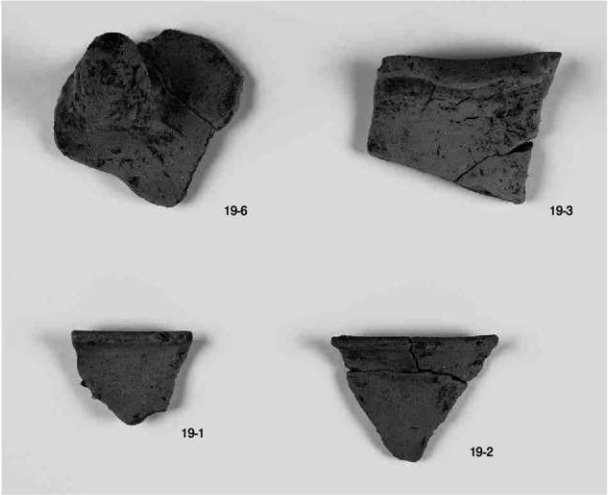
①土馬・紡錘車　出土状況（西から）

②土馬　出土状況（南から）

小郡前伏遺跡５　出土遺物①







小郡前伏遺跡５　出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書７
副書名	平成 25 年度　国庫補助事業　市内遺跡調査報告書
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第２８８集
編著者名	上田　恵／西江幸子
編集機関	小郡市教育委員会
所在地	〒838 - 0198　福岡県小郡市小郡 255 - 1　Tel. 0942 - 72 - 2111
発行年月日	2015（平成 27）年３月 31 日
保管場所	〔写真・図面・遺物〕小郡市埋蔵文化財調査センター
保管場所所在地	〒838 - 0106　福岡県小郡市三沢 5147 - 3　Tel. 0942 - 75 - 7555

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおいた 大板井遺跡 28	おごおりし 小郡市 おおいたい 大板井	40216		33° 39′ 96″	130° 55′ 99″	20130819 ～ 20130913	67.9 ㎡	個人住宅 建設
おごおりわかやま 小郡若山遺跡 7	おごおりし 小郡市 おごおり 小郡	40216		33° 40′ 36″	130° 55′ 52″	20131206 ～ 20131216	83 ㎡	個人住宅 建設
やちかさやす 八坂末安遺跡 2	おごおりし 小郡市 やさか 八坂	40216		33° 21′ 46″	130° 33′ 48″	20131119 ～ 20131220	120 ㎡	個人住宅 建設
おごおりまえふせ 小郡前伏遺跡 5	おごおりし 小郡市 おごおり 小郡	40216		33° 23′ 54″	131° 26′ 49″	20140206 ～ 20140226	60 ㎡	個人住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
大板井遺跡 28	集落	弥生 中世	ピット・溝	弥生土器・土師器・陶磁器
特記事項	南北に隣接する大板井遺跡の調査地で検出されている弥生時代中期の集落が延長することを確認した。			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
小郡若山遺跡 7	集落	弥生？	溝	なし
特記事項	南に隣接する小郡若山遺跡の調査地で確認されている弥生～古墳時代の遺構は認められず、集落域の空閑地として使用された場所と考えられる。			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
八坂末安遺跡 2	集落	中世 近世	溝・土坑 不明遺構	土師器・陶磁器
特記事項	北西約 500m の位置に所在する西鄕坂城跡、既調査地である八坂末安遺跡 1 と同時期の集落を確認している。			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
小郡前伏遺跡 5	集落	奈良	溝 （道路状遺構）	土師器・土馬・石製品
特記事項	奈良時代の官道とその側溝を確認した。			

埋蔵文化財調査報告書７

―平成25年度　国庫補助事業　市内遺跡調査報告書―
小郡市文化財調査報告書第２８８集

編集　小郡市教育委員会
　　福岡県小郡市小郡 225 －1
印刷　片山印刷有限会社
　　福岡県小郡市祇園1丁目8-15